

ある読者からのおたより④

自己を確立させるのは同一／差異の認識である。自分で自分の中身を覗いたところで、そこに自己が確立されることはない。自己の認識は他者がなければ行えないのだから。むしろ一人で自己を探すことで傷はいっそう奥深くに食い込んで深化していくのではないだろうか。不可視な他者はさらに姿をくらまして、傷の主体、原因を自己にのみ押し付けてくる。不可視な他者の視線は、例えば自衛や諦めといった「内省」という名の内面化を強要するのだ。

ここで不可視な他者についてどういったアプローチができるか話すことは難しい。しかしこうして考え、表出させることが何よりも大切だということは確かに分かる。

さて、急に歌詞に戻るが

僕が石なら、犬なら、歌なら、酒なら、よかつたのに……

最終的に僕は「何にでもなる」「（僕が何者か僕には）分からないから」という歌詞で終わるが、僕はその「何にでも」を「僕自身」として受け入れようとしているのかもしれない。「君 you」は単数・複数問わず誰を指してもいい。僕であること、その難しさは自分が傷を負って何者かになる覚悟であり、不可視な他者に「ならない」「覚悟でもあるのではないだろうか。」

アルバム最後の曲「2023」にて僕は再度「僕は君を楽しませられるなら何にだってなる。僕が何者かなんて僕には分からないから。」と言うが、その後に「僕が誰なのか探し出すのにはもう遅すぎるだろう」とも言う。

「もし僕(僕)が僕(君)になれるなら、とつづくにそうなってるよ」……「これ(F.H.S)が僕(君)なら、まあ精一杯やるよ。最悪なことは君の分まで引き受ける。そうしたら君は君でいられる。僕はそれ以外になる。多分そいつが僕なんだ。」

「僕」の諦め、そして「君」という希望。私はこの歌詞から、一体には成れないが限りなく近いというもどかしさのようなものを感じた。難しいというより、もどかしいのである。なにも上手くいかないのに、ほんのわずかに諦めきれない魅力があると感ずるのである。アツイアルバムである。

以上、読者からオススメのアルバム、ATRによる「The Maybe Man」について少し語らせていただいた。ここまでお付き合いくださった皆さまに感謝申し上げます。

※おたよりは今月号で終了となります。

読者からのおたよりを

読んでの所見（戸田竜也）

全4回にわたり紹介させていただいたATRの「Maybe Man」の歌詞に沿った考察は、深い洞察に富んでいた。自己のアイデンティティを確立するために他者との差異を認識し、さらに「傷」つくことでアイデンティティを強化する。しかし、内面化された傷は他者や自己に対しての加害性を帯びる。表面化するためには、他者との出会いが重要な意味を持つ。私はそこに「対話」という要素も必要不可欠だと考える。そもそも私たち専門職は他者と出会い、対話することができているのだろうか。専門性という鎧は時に人間性を喪失させ、機械的・手続的に他者と対峙することになってしまうのではないだろうか。最近、当事者研究に取り組んできた向谷地生良は、当事者研究の障壁として「距離をとる」ことを挙げていた。これはフロイトの力動精神医学に影響を受けて今なお根強く専門職の中で共有されている発想であると指摘する。もし仮に公私の線引きを明確にし、「距離をとる」ことで治療効果が上がるのであれば、それは他方で、「傷」の内面化を促す危険性もあるのではないかとおたよりを読んで感じた。この狭い枠で所見を述べ切ることは困難を極めるが、最後に読者から紹介され、興味深い内容が記されていた本を紹介する。「争わない社会―開かれた依存関係をつくる―」NHKBOOKS 佐藤仁 2023。